

翻 訳

賀州八歩鎮の打醮儀礼について

徐桂蘭 徐傑舜

蕭 紅 燕 訳

1999年2月、筆者は広西省賀州市八歩鎮でフィールドワークをおこなった。その際、厦良村の村民蔣水群氏に打醮についてうかがったが、次がその大まかな内容である。

打醮とはどういうことか。打醮とは、早い話が、土地の人のいう「人に善事を勧める」ことである。つまり、宗教信仰の形により神壇や社廟で祖先祭祀をしたり、子孫が定期的にお礼参りしたりすることで、生きているうちになるべく善行を重ね、功德をするよう、人々に勧めることだ。民間ではこれを「積陰功」という。

打醮の儀式は賀州地区では3年ごとに行われる。しかし、当地の神壇や社廟、たとえば土地廟の新築や改築にあてれば、その年に儀式が必要になる。参加者はふつう、ある特定の民族集団を主体とするものの、同じ村や近隣村に住む他民族の場合も、ご祝儀さえ出せば参加することができる。また、賀州地区の打醮儀礼は土地廟で行われ、土地廟の周辺に住む人たちが一体となって同じ土地神を拝む。

一、打醮儀礼の組織と役割分担

打醮は参加者が多く、儀式が複雑かつ非常に厳かにおこなわれる民間宗教の儀式である。毎回、あらかじめ周到な準備を整えるため、経済力のある熟練した醮会、つまり打醮理事をまず設ける必要がある。醮会は醮主が1名、副醮主が若干名、総理事が1名、副総理事が3、4名のほか、十大員があり、結榜員が2名、および3名から5名の香公からなっている。

誰が醮主になるかは自由意志にはよるものの、公認されなければならない。一般に経

済力のある、しかも儀礼の際、もつとも多額の資金を出資する者を選ばれる。

1998年、厦良で打醮が行われたとき、蔣玉林が醮主となって、1300元出資した。醮主は出資額だけではなく、人柄がよく人望のある人でなければならない。醮主になることは非常に名誉なことで、祖先や神さまから庇護してもらえると信じられている。だが、儀礼の進行中、醮主は特にすることもなく、全体のリーダ役として現場に立ち会うだけでよい。

副醮主が3名から5名選ばれる。これも自由意志によるが、本人の経済力と人望によって決まる。その出資額は醮主に比べてやや少ない。1998年のこの打醮で選出された3名の副醮主の出資額はそれぞれ1200元、800元、500元と、均一ではなかった。副醮主の仕事は醮主を助けて儀式を取りしきることであり、肉体労働はしないが、かれらが多額の出資をするので、神さまの恩恵を受けられるし、また土地の人々からも尊敬される。

総理事は1名だが、かれが実質的な総指揮である。打醮期間の世話役でもあり、各種の雑事、人員の割り振り、経費の工面や収支などはすべて総理事があたらなければならない。したがって、総理事は醮主や副醮主と違って、その人の能力で選ばれる。信頼のおけるやり手がどうしても必要だ。また、総理事はご祝儀だけ出せばよい。もちろん、本人の意志でそれ以上出資してもかまわない。いずれにしても、儀式をきちんと取りしきり、宗族の人々に満足してもらえれば、みんなから尊敬され信頼される。

副総理事の人数は儀式の規模によって決まる。一般に4,500人が参加するような大型、中型規模の場合、少なくとも3、4名の副総理事が必要だ。副総理事も総理事と同様で、能力がまず問われる。その主な仕事は儀式を順調にすすめるよう総理事を助け、必要な時には十大員といっしょに道公のあとについて「行拝礼」（神々を拝む）をする。

さらに、「十大員」というのはまた別に選出される10名の役員である。人柄がよく、しかも出資できる人というのがその選出基準となる。出資額は醮会のなかではやや少ないものの、それでも100元はかかる。かれらの主な役目は儀式の過程で、参加者全員を代表して神々や祖先に跪いておじぎをすることだ。責任が重大で体力的にもかなりきつい。

ほかには結榜員が2名いる。村民や村の幹部が人選を提案し、みんなに認めてもらう。読み書きができ村民たちに信頼され、村民のために熱心に事を運ぶことがその条件だ。結榜員は金銭管理にあたる。資金集めから儀式に用いられる支出を決算して、帳簿を作成し醮会に確認してもらってから一般公開する。その出資額は100元前後である。

ほかには香公を3名から5名設けるが、焼香の作法に詳しい者を醮会が選出する。

二、打醮儀礼について

打醮のための資金捻出は、委員たちの出資のほか、村民たちの寄付金が主となる。この出資を「湊份子」という。どの参加者も寄付金を出すのが、5元、10元、20元と、金額の制限はとくにない。1998年、旧暦12月2日に行われた打醮儀礼の際、厦良土地廟所在地の村民たちが全員、計400名参加したが、1人あたりの出資額は20元であった。

また、儀礼に参加するかどうかについては、すべて自由意志によるものとし、無理やり参加させることはない。調べによると、およその村民は進んで参加し、この行事はたいへん喜ばれているように思われる。

規定によると、儀礼に参加する場合、どの家でも祝いの対句を達筆な人に書いてもらい、それを玄関先に貼りつけておく。そして儀礼の期間中において、すべての参加者は精進料理にしなければならず、潔斎期間は儀礼の長さで決まる。これに違反しようものなら、誠意がないと見なされ、儀礼の効果もないようだ。なお、儀礼の期間は醮会が決めるものとし、儀礼の目的や参加者の数などで決まる。普通は2日3晩、3日4晩の場合もある。

道公（祭儀を実際に進行させる司祭者をいう）について。どこの道公チームに頼むかは、醮会の判断にまかせる。6、7名が一般的で、1名あたりの労働量を5コマとする。したがって、道公チームを頼む場合、約1300元かかる。また、道公たちの分け前については、頭役の道公が配分する。賀州の場合、地元出身の道公は均分するのが普通である。これに対して、客家の場合となると、大師父が階級によって配分し、大師父自身はやや多めに報酬を受ける。

三、打醮儀礼の過程と内容

1. 請水

請水とは四海龍王しやうらいを請来する儀礼であり、打醮の最初の儀礼である。その際、醮主、副醮主、総理事、副総理事、十大員および結榜員たちが赤い布や花飾りを身につけ、各

自の役柄を示す印もつけて道公師父の先導で、意気揚々と川辺へ水を取りにいく。道中、道公師父は水幡を掲げている。

この水幡とは葉や先端のついた竹竿に、道公が赤い紙に書いた取水符が貼りつけてあり、その上に四海龍王や川の神々の名前が書き込まれている。葉や先端のついた竹竿には、儀礼が首尾よく行われるようにという願いが込められている。水を取ってきてから、一行は土地廟の裏側の広場に戻ってくる。

2. 請 龍

青龍と赤龍の化身とみなされる長さ1丈2尺、または2丈の青い布と赤い布を用いて、まず道公がこの龍の前で読経する。醮主が両手で布の一端をしっかりとおさえるようにし、これを「撐龍頭」という。一方、副醮主と十大員は龍の胴体や尾をおさえておく。一人が生きた雄鶏一羽を持って龍の頭部に、別の一人が鴨一羽を持って尾のあたりにつき、これを道公が先導して歩く。

龍を請来して土地廟にもどってきて玄関に入るときは、爆竹を鳴らす。それからお盆に米を載せるが、その米の中にはコインを少し入れておき、龍の鱗と見立てる。さらに、赤い布を龍の角に見たててしつらえ、上下に合わせた二つの茶碗を半分合わせるようにし、これを龍の口とする。茶碗の中に落花生油を入れ灯りをつけ、さらに龍の頭部と足元に蠟燭をたて、線香をあげる。

つぎに、道公が油灯らんぼをとって土地廟の神々にそなえ、龍の頭部と足元に置いてある線香から1本ずつとって、香炉に入れておく。また、お盆を祭台にそなえ、お盆に載せてある米や金は「吉利米」と「吉利銭」として、儀礼終了後、総理事がこれを打醮に参加した人々に分け与える。このことを「分吉祥」という。

3. 發文課

發文課とは招待状を出すことであり、神々、道公の祖師や兄弟弟子、姉妹弟子たちに助け舟を出してもらうことである。

4. 請 神

請神とは神々や祖先霊に儀礼に出席してもらうことである。醮堂でどの神々に来てもらうかは道公が決める。一般的には天神、地神、陰陽神、水神、火神、それから四大天王、阿弥陀仏、如来仏および山や川にかかわる神々が請われる。ほかには道公の祖師や兄弟弟子、姉妹弟子、さらに村の各神廟の神々をも請来する。その際、各神廟で線香を

3本あげる。線香に火をつけてから、道公が読経をはじめ。どういうご用でどの神さまにご足労いただくかを申し上げる。その後、2本の線香をそのまま置いて、残り1本の線香を持ちかえり、当該の神さまはすでに了解済みということを示す。

さらに醮主、副醮主および総理事をはじめ、役員たちの家族の祖霊にもご足労願う。その場合、まず醮主から、それから道順に役員たちの祖霊に願い事を頼み、赤い紙に宗主の位牌を一つ記入し、別に祭台を設けてこれを順番に祭っておく。

5. 拝留

拝留とは神々に休憩してもらうことである。その際、道公が役員たちを率いて神堂の前に跪いてお願いをする。そのあと全員が休むこととなるが、時はすでに深夜に至っている。

6. 開堂

翌日早朝、銅鑼などを叩いて儀礼の再開を宣告する。

7. 請神洗臉

神々はとてもきれい好きなので、神々のために真新しい洗面器、タオルを用意し、きれいな水を張っておく。そこで道公がお経をあげ、神々に洗面してもらう。最初は醮堂で、それから廟堂で洗ってもらう。

8. 起幡

幡とは神々の来る道を照らすための道印である。したがって、どの幡にも馬灯が吊してある。このランプが引路灯となり、打醮儀礼の行われる場所に到る道しるべとなる。馬灯を用いず、高さ3メートルの青竹竿の先端部に四角い枠をこしらえることもある。この枠に赤い紙を貼りつけてスタンドカバーのようにし、その中に赤い蠟燭を点す。こうした幡を各方向へ向かう道の分岐点に置いておく。

幡を何本たてるかは、儀礼の規模で決まる。2日3晩の場合、5本の幡をたて、そのうち4本の幡は東西南北という四つの方位をも示すものとする。なお、幡にはそれぞれの方位を代表する神々の名前も書きこまれる。幡をたててから儀礼終了までずっと灯りをつけておく。

9. 安竈君神位

道公が細長い紙に「定神竈君神位」と書いてから、その紙を木板で作った位牌に貼りつけるか、じかに壁に貼りつける。また、小さな机を台所の竈神の前に置いて、机の上

に米の入った茶碗をおき、これを線香や蠟燭たてとする。さらに机の上に精進料理、果物、酒、茶をそれぞれのお碗に入れて、儀礼終了までそのまま並べておく。これが竈君神台である。設置してから、道公が経をあげはじめる。

10. 行 朝

朝食時になると、道公が先導となって齋主や齋会の役員たち一行は神幡の飾られた場所へ参ったあと、竈君神台、廟堂の順で経を唱え、まもなく朝食が始まることを神々に知らせる。

11. 上 表

道公は齋会の参加者リストを齋主、役員及び一般村民の順で玉皇大帝に上奏する。

12. 施陽食

道公は経をあげてから、飴玉、菓子、ビスケット、果物などを参加者たちに配る。

13. 道公念経

観音経、仏陀経、雷祖経などをあげるのが一般的である。約1時間かかるが、短い場合でも30分は必要だ。

14. 拝 神

道公を先導に役員たちは神々を拝む。道公が神々の名前を読みあげつつ、「阿弥陀仏」と唱えながら拝んでいくが、役員たちはそれに従う。

15. 拝 懺

道公は経をあげ神々に謝意を述べる。打齋委員会に対する神々の加護に感謝するとともに、神さまに対する一部の人々の日ごろの不義や失礼な行為について懺悔をし、神々の許しを乞う。この場合、必ず跪いて拝まなければならない。道公を先頭に役員たちがその後ろにひかえている。2名の道公が交代で跪いて拝み、ほかの者はそれに従う。こういう時には、十大員とよばれる者が立ち会う必要があり、神々に拝むことはかれらの主なつとめなのだ。

16. 拝留（同上）

17. 鬧堂

翌日から始まる。

18. 行朝

これも前日同様、道公は役員たちを率いて神々を拝み、また竈君を拜んでから朝食が

始まる。

19. 安大士

安大士はつまり、観音さまの位を安置すること。打醮儀礼において観音さまは大士と呼ばれる。観音さまはさまざまに変化できると民間では言い伝えられており、鬼王に姿を変えた観音大士を請来し、鬼魂たちに衣食を分け与えてもらうのだ。この仕事は観音大士のみが適任と見なされている。観音さまのおかげで、食べ物をめぐる鬼魂たちの争いはじめて免れると言われている。

安大士の儀礼は適当と思われる場所（ふつうは戸外の壁の隅に設けられる）に観音像をかけ、両側に対句を貼りつける。さらにその手前で線香をあげ、清茶を供える。道公の読経によって観音大士をそこに安置させる。その後、乞食、または村で一番貧しい者に来てもらい、大士神位の前で一晩中線香をあげさせる。のちに醮会から報酬が支払われるが、乞食は他の村民と食卓を囲むことが許されず、別途に食事を与えられる。この焼香は観音さまを見送るまで続く。また、「行朝」儀礼が行なわれるたびごとに、観音大士に食事をふるまう。

20. 道公念経

上述したように、道公が救苦経、観音経、雷祖経などを約1時間ほど唱える。

21. 拝懺（同上）

22. 行朝（同上）

23. 放生

放生によって人々の善行を神々に示し、善根を積むよう人々を戒める。その際、広い場所に八仙卓を置き、市場から買ってきた小魚や小鳥などをその上にのせて、道公がこれらの生き物に向かって経文を唱える。終了後、醮主と副醮主によって魚や鳥を放してやる。その間、子どもや若者たちはそばで見物する。

24. 行朝（同上）

25. 煞邪

煞邪とは儀礼参加者の家の邪気を祓うことであり、道公が先導となって香公も同行して各家を順番にまわる。各家の戸主は邪気に見立てられた鶏の羽と木炭を紙に包み、玄関先に置いておく。また、赤い紙包みに銭数十銭を入れ、これを「利是包」として玄関先に置く。

道公や焼香公の一行は、村人の玄関先に来て来ると、煞邪勇士符を貼り、邪気包と利是包を持ち帰る。その後、集められた邪気包を醮会のこしらえた龍船に載せ、醮堂の前に置いておく。それから道公が放水灯という道場をおこなう。

26. 放水灯

醮会がこしらえた3個の龍頭灯を祭台の前に置き、道士が龍頭経を唱えてから、役員たちを先導して川へ放水灯に行く。この水灯はすべて役員の手によって作られ、その数は参加者数や資金によって決まる。厦良村では、1998年の儀礼に用いられた水灯は1,500余個であった。

水灯をのせた龍船を、道公が先頭に立って役員たちがそれに従い、龍船を川の中へ押し進めていく。舞獅隊、八音隊および見物者の一団が川辺へやってくる。そこで爆竹を鳴らし線香をあげ、道公が龍王河神に経文を唱える。その後、太鼓や銅鑼をたたき、音楽を奏でるなかで、人々は邪気包を川へ投げ込み、水灯に火をつけて川へ流していく。

27. 蒙山

蒙山とは陰間の孤魂たちに粥を施すことといってもよい。蒙山台をたて、四角い杓を二つ、三つ積み上げるが、四つ積むこともある。さらに台の上に果物、飴などをのせるほか、大きな盆に米をのせておく。その米の上にコインやもち米で丸めた団子（これが「仙丹」とよばれる）をおく。米にはさらにもち米でこしらえた七、八本の仏手を挿しておき、その仏の指のしぐさがそれぞれ違い、仏教の内容と関連している。

道公は蒙山台に坐って観音大士に向かって経文を唱え始める。この時、委員が赤いランプを三つ道端におくが、これを「放路灯」という。各方面へ通じる道筋の両側に紙細工の小さな白い傘をさし、赤い蠟燭をたて線香に火をつける。蒙山台の下の道端に二本の「天燭」をたてておく。天燭とは、一本の長い竹竿の先にナイフを入れ真中にとめ木を挿しこみ、そのとめ木に大きな蠟燭を立てることである。

読経が終われば粥を施しはじめる。炊きあげた粥を数人で手分けしていくつかの道筋に沿って歩き、施す範囲は遠いほど良いとされている。粥の施しがすむと、観音大士の南海への帰りを見送る。道公が蒙山台の飴や果物、コイン、米、「仙丹」などを見物人に撒く。見物人たちは先を争うようにこれらのものをつかみとる。こうした仙果仙丹を食べたら、無病息災と家庭円満が得られるという。

28. 行朝（同上）

29. 拝留（同上）

30. 妥 土

この儀礼は蒙山儀礼のあと、夜明け前におこなわれる。土地廟の前で道公が東西南北中という五方龍神を書きあげてから、役員をつれて五穀豊穡を神々に祈願し、読経する。

31. 送 神

鶏、豚、牛肉や酒、茶、おかずを用意して、線香をあげ蠟燭を点して経文を唱え、神々を見送る。

32. 倒 幡

道公が引路幡を取り込み、さらに引路灯をとって醮堂におく。儀礼終了後、この灯を醮主が自宅へ持ち帰る。この灯は俗に「天灯」といい、家族構成員を増やすことを意味する同音である「添丁」ができると信仰されている。

33. 送竈君

鶏、豚、牛や線香、蠟燭を用意し、竈神を見送る。

34. 散 醮

儀礼が終了する際も、いくつかの恒例行事がある。その一つは「送穀娘」である。この行事は最終日の午後、放生儀礼が済んでから、またはそれと同時にこなされる。籠を一つ用意し、その中に粉末を数10キロ、物差し、秤、鏡、櫛、算盤をいれておく。道公が「穀娘」としての「稻草人」（薬人形）をこしらえ、醮主の妻の服を薬人形に着せて、紙に五官を書いて顔と見立てる。さらに、葉っぱつきの竹竿に道公が書かれた符を貼りつけ、これを「祈穀幡」という。

道公は大きな秤をその竹にくくりつけて、醮主とともに籠を回りながら読経する。読経が済むと、道公は八音隊、獅子隊の人々といっしょに祈穀幡、籠と薬人形を醮主の家へ送り届ける。そこで、穀娘を醮主夫婦が大きな秤で担いで、二階の粉末置き場におき、さらに祈穀幡を持ってきて粉末の前におき、穀娘の前に茶、酒、線香、蠟燭を供える。道公は経文を唱え、家の主が爆竹を鳴らす。3日後、穀娘の服を脱いで、薬人形や祈穀幡を玄関先で燃やしてしまう。この送穀娘の儀礼を済ませると、醮主家では翌年の五穀豊穡と無病息災が保証されるという。

もう一つは醮会の終了儀式である。役員たちは神々を祭るための鶏、豚、牛肉をおろして会食をするが、各家でも鶏や家鴨を殺して廟の神々を拜ってから醮会の無事終了を

祝う。

三、3日3晩の打醮儀礼

3日3晩の打醮儀礼は上述した内容のほか、次のような儀礼もある。

拝諸天。この儀礼に際して三つの八仙卓を一つの神位とし、24の神位台を用意しそれぞれに幡をたてる。それから東西南北の四大天王および玉皇大帝やその他の神々にご光臨を乞う。4名の道公が経文を唱えるなかで、四大天王や玉皇大帝の位を道公と醮主だけが拝み、その後、役員たちが道公についてその他の神々を順番に拝む。

宴口。この儀礼は、四大天王と玉皇大帝に宴会に来てもらうために行われるものである。3時間半から4時間はかかる。東西南北中という五つの方位に祭台をおき、道公が真中にいて四つの方位に向かって拝む。

このほか、4日4晩にわたる醮会の場合には、はじめて「破八卦陣」の儀礼をおこなう。そのやり方は、インクまたは泥で広場に八卦の図を描いて、手に槍をもち、赤い頭巾をかぶった道公がその槍を振り回しつつ、八卦を歩き経文を唱える。

四、武壇打醮

ところで、打醮儀礼には文壇と武壇という二形式がある。だが、賀州の地元の人々は武壇をしない。解放前、鐘山あたりでは武壇打醮をおこなっていたが、解放後見られなくなった。賀州でも解放前、武壇のできる道公がいたらしいが、のちに後継者が途絶えてしまった。したがって、武壇打醮をしようものなら、客家の道公に頼まなければならない。

客家人の打醮儀礼には、文壇と武壇の両方を設けて同時進行させる。武壇と文壇との違いは招兵招将、下油鍋、吹油火、上刀山、過火煉などのパフォーマンスが加えられることにあり、醮会の組織形態が同じである。

1. 請龍

請龍儀礼をおこなう際、武壇では錫角（いまでは牛角の形をした銅製のものを使う）を吹くが、文壇では銅鑼や太鼓を用いる。

2. 下油鍋, 吹油火

廟を新たに建てたり修復したりする場合, 最初の打醮では, 請水儀礼の前に下油鍋, 吹油火が必要だ。新しい鍋に落花生油をひいて鍋を熱くしてから, 道公が手にもった湯葉を鍋に入れて時計回りに数回か回す。これが下油鍋といい, 邪神邪鬼を追っ払うものだという。

それから道公が度数の高い酒かアルコールを口に含んだまま, 手にもった松明を鍋の上近づけ, 口の中のアルコールを松明に吹きつけると, 鍋から火が勢いよく燃え上がってくる。これが吹油火といい, 邪鬼や魔物を祓うことが目的だ。

3. 進 香

3名の道公が香花舞を踊る。近くの廟堂を回り, また先祖の位牌からはじまり位牌の前で舞い, 舞が終わると線香をあげていく。

4. 上刀山

高さ数丈ほどの柱をたて, その柱に刃が上向きになっている36本のナイフを差し込んでおく。道公や肝玉の太い「仙婆」が素足でこれらのナイフをたどって柱の先までよじ登っていく。これが上刀山という。規定によれば, 道公, それから仙婆, 仙公の順で登ることとする。

そして, 刀山に登りつめて落ち着いた道公は角を吹き, 読経をはじめ。その後赤い縄を使って竹で編んだ籠が下ろされる。籠のなかには, 道公が書いた神符が1, 2枚入っている。見物人の中でこの神符が欲しい者がいれば, 現金を籠に入れて神符をもらう。値段は道公の言うとおりとされ, 値引きは許されない。売れたらまたもう一回籠に入れて下ろされてくる。ほかに刀山に登った仙公や仙婆たちも同じように神符を見物人に売りつける。神々に咎められることを少しも畏れていないようだ。

5. 過天橋

道公が丸太で小川に簡単な橋をかけ, これを「長寿橋」という。赤や緑など五色の小さな旗を橋の両側に挿し, 道公が書いた神符を橋のたもとに置いておく。この長寿橋を渡れば長生きできるといわれるので, 夫婦で手に手をとって渡る村民は, 寄り添って老後を過ごせることを祈る。また, おじいさんが孫の手をひいて仲良く橋を渡り, 無病息災を祈る。橋を渡る者は, 赤い包みを用意して神符を買っていく。

6. 過火煉

文壇でも過火煉という儀礼ができるが、普通はやらない。武壇では必要不可欠となる。よく乾いた薪を50キログラム用意し長さ4～10メートルの火道にし、薪に火をつけてからその上にさらに木炭500キログラムをかけて、木炭が真っ赤になるまで燃やす。もし炭火の色がまだ十分でない場合は、塩を撒いて炭火を真っ赤にしておく。これが火煉という。

道公がこの火煉の前に法術を念じ、さらに師匠や兄弟子たちの助けを求める。その後火を消して、生きたままの鶏と家鴨を火煉の端から端まで引っ張って、生き物が焼け死にしないことをみんなに見せつける。それから、道公が火煉を渡りはじめる。火煉を渡る第一歩に符を燃やし、真中まで来た時にも符を燃やし、渡り終えるときにもう一枚燃やす。この符は「学山符」という。醮会の人々も道公のあとにつづいて火煉を渡っていく。

7. 唱鶏歌

鶏歌とは客家の韻文であり、とんち話や笑い話の類が多い。道公が掛け合いの形式で演じるので、かなり楽しめる内容である。

8. 招神兵神将、買馬

八仙卓を二つおいて、その上に1～1.5キログラムの豚肉やまな板、包丁、茶、1～1.5キログラムの米、ほかに油や塩を置いておく。さらに線香と蠟燭を用意して、これを招兵台とする。道公が「招兵人」として、醮主が「招兵都督」で、もう1人の道公が「点兵人士」として招兵台の横に腰かける。年寄りまたは副醮主が「支糧官」となり、「点兵人士」の真向かいに坐る。

そこで、道公が東西南北中という五方面から来る神兵を代表する赤、緑、白、黄、青の小さな旗を手にもって、「招兵術」を念じはじめる。一段落すむと、兵馬がやってきたということで、1枚の旗に線香1本を後ろに立っている「都督」に渡しておく。こうして五つの方面からすべての兵馬がそろった時点で、道公が経文を唱え食糧を分け与える。分ける際には包丁を使って豚肉に切りつけると、「支糧官」が返事して食糧を受け取る。

その後、道公が先導して都督が兵馬をつれて廟堂へ向かう。廟に入る時、爆竹を鳴らし音楽を奏でて、神兵神将の到来を歓迎する。都督は兵馬旗を神の像の横におき、道公

は読経し神兵神將の位を安置する。そして、迎えられた神兵神將は廟の神の管理にまかせることとする。 (インフォーマント：賀州市八歩鎮厦良村蔣水群氏)

筆者紹介

徐桂蘭氏：広西民族学院図書館副研究員。代表作は『漢族紅白喜事風俗』『広西風俗』などである。

徐傑舜氏：広西民俗学院教授。主な著書には、『漢民族發展史』（四川民族出版社 1992）、そして、主な編著として、『人類学本土化在中国』（広西民族出版社 1998）、『雪球－漢民族的人類学分析－』（上海人民出版社 1999）などがある。

謝 辞：

翻訳文の添削は、友人大大上葉子さんを煩わしたことを、ここに記して感謝の気持ちを申し上げます。ただ、文中に間違いがあるのであれば、わたしがその文責を負うこととなります（訳者より）。